

記主禪師の教學

千 葉 良 導

吾人は「若しも」云ふ事に就て、時折考えさせられる事が有勝である。殊に偉人傑士の事蹟に就ては、より多く考えさせられる。孔子も論語に管仲なかりせば、われ衽を左にせん云はれてゐるが、吾人は鎮西記主源智の三上人に就て、此のifの問題はいづれ劣らず同様に考えさせられぬ事は無ではないが、就中記主禪師に就ては、特により強く考えさせられる。茲に禪師の六百五十年の遠忌を迎ふるに當つて「若しも禪師の輩出なかりせば」云ふ事を思ひ浮べた時、吾教團の上に就ても、教義の上に就てもかなり大きな問題であらねばならぬ。禪師在まさりせば鎮西正流の教團其の教線の擴張は如何であつたか、善導、宗祖の正法は如何になりゆきしか、此のifの問題を擎けて、あの當時教界の情勢を回顧した時、孔子が管仲を回想せられし如き心境以上の重大さを感じずには居られぬであろう。騰譽實海が

大師滅後、門弟各構一義、多岐紛諍、人惑適從一

こも云へる如く宗祖の滅後、聖道諸家が本願念佛義に對する認識の不足より起る、念佛の侮蔑其の迫害や門下異流異端の擡頭に對しては、鎮西上人既に學生の努力を盡されしこ雖も、何分九州邊陲の地である爲、其の教化の力は日本全土にゆき亘らなかつた。記主禪師が鎮西の口決を稟承して、錫を關東の地に移し、著述を教化に八十九の長き生涯を捧

けて、本願念佛の正義を明激にし、關東に於ける教線擴張の基礎を築き、門下より有爲の人才を輩出せし事は、正法憲章の上には何ミ云ふても偉大なる功績であつた。

一

記主禪師の教學は其の著述たる所謂五十餘帖に包括されて居る。五十餘帖は宗義口傳の叙述と曇鸞道綽善導及び宗祖鎮西等の述作に對する釋義の記述であるが、單なる難文章句の訓詁的釋義でもなく、又古師論疏の單純なる祖述でもない。精緻懇篤を旨とし宗教的大精神に燃えて、淨土往生本願念佛義に對する幾多の疑問を解決し、宗祖門下の異義を論難して其の謬見を是正し、偏すら正法の憲章に努め、遠く遐代の者に往生の大道を開陳されて居るものである。傳通記奥書には

多日筆を染め、久しく心眼を費す、この功他にあらず、偏に出離の爲のみ云云

又決疑鈔の自序には

聿に來命に順つて愍に以て之れを書す、號して選擇傳弘決疑鈔といふ、傳は先師に傳ふるなり、弘は遺弟に弘るなり、決疑は假に賓主を立て粗は疑關を説き、鈔は衆文を抽て之を筆點に題す中略庶幾くは百世萬代克く易行に赴き、火界を別れて西刹に屈らん。

又決答疑問鈔の序には

然阿齡六旬に逼る、目闇く手振ふ、然りも雖も來問の志を感じ、利生の多からん事を思ふて、餘寒の風を凌ぎ頽齡の筆を走らし、先聞の趣を載せて、後輩の疑問を答へ畢ぬ。云云

述作の趣意、他も推して知るべきである。

三

總括的に五十餘帖述作の基本的精神も見るべきは

文をば諸佛の教意に見入つて、義をば極惡の罪人も往生する様に言ふべきなり。

此の語は要阿夢中感得の語であつて、後日鎮西上人に面接して其の實を確め即時自房の柱に銘記したものである。記主禪師は此の夢告の大訓を生涯の箴として、常に心を末代愚惡の人（下三品の機）の實際に訴へて、念佛實踐の心行業を誰れ人にも實際に實行し得る心行業として釋示された、此の釋述こそ記主獨特の妙釋とも云はれ得る者である。善導宗祖の意も本より同一ではあつたが、著述文面の上には未だ確然と顯はれず、後學の者の如何様にも解釋出來る餘地があつた、之れ宗祖門下に異解異流義が輩出した所以である。

さて諸佛の教意に見入る等きは、拾遺鈔には、總じて淨土の經文を指し、別しては一句一文の由來する根本的精神も述べ、又三經三佛の本意に契通するこゝ、又隨順佛教、隨順佛意、隨順佛願の精神を指すも述べられてある。つまり彌陀釋迦諸佛の大精神を確實に把握して教義を取捌かんとするのである。そして此の氣分が記主禪師の五十餘帖を一貫したる基本的精神であつた。此の諸佛の教意に見入る底の基本的精神の内容を構成するには、少くも釋尊一代佛教の奧義を窮めねばならぬ。禪師は二祖鎮西が所謂「單聖道門の人、單淨土門の人は之れ（本願念佛往生の義）を知るべからず、聖道淨土兼學の人之れを知るべし中略此れ則ち聖教の源底なり、法門の奧藏なり」の語を一代修養の指導精神として、此の語を真正直に受け入れて、全佛教の研鑽に畢生の努力を盡し、聖教の源底を叩き法門の奧義に通じて、諸

佛の教意に見入る底の識見を以て鸞師の論註を捌き、導師の觀經疏を祖述し、宗祖の選擇集を釋述し、在阿の請求に應じて後學の疑問を解決された、斯くて五十餘帖は皆同様に其の基本的精神によりて記述されたのである。して見るに五十餘帖には三佛の大精神が基本となり一貫して流れて居る、換言せば五十餘帖は三佛大悲の流露であるとも云ひ得らるゝのである。

然かし今五十餘帖を通覽するに、時折隨處に性相學的の緻密なる釋呈の存するあり、或は繁鎖の嫌ひなきにあらざれども、ソハ禪師が聖道執見の學徒及び同門後學の疑惑を解決せんが爲の親切綿密なる精神の流露である。然るを其等の釋呈を捕えて禪師の教學を云爲するは、未だ禪師を認識する事の尙遠き者であちねばならぬ。

四

記主禪師が五十餘帖中特に重きをおかれたのは、教理（宗旨、宗義）の方よりは寧ろ實踐（行儀）の方面である。蓋し之れ本宗元來の宗是である、行儀中殊に三心義に就ては周到綿密であつた。鸞師の論註にしろ、導師の觀經疏にしろ宗祖の選擇集にしろ、實踐上の詳細なる點に至りては、文面顯然を缺くところあるを以て如何様にも解釋し得らるゝ餘地がある。至誠心の釋に就ても、導師の疏には「至者眞、誠者實」もあつて、實踐上如何なる心掛なるかを具體的に明かされてない故、或は之れを嚴肅なる意義に解して、至誠天に通ずる底の心境なりと解し、或は韋提希夫人の信心徹到の心狀なりと、或は斯る眞實心は凡夫には本より持合せがない、至誠心にしる深心にしる三心は皆佛の方にありと云ふ如き種々なる義が顯はれた。論註の如實修行の語に對する解釋も、實相身爲物身を知るに云ふ語に就ても、一法句の一元に對しても、業事成辦に就ても何れも同様に異義區々である。そして彼等異義の多くは之れを吾人一般凡夫の實踐的

事實に即して、廣く十方衆生の機に當嵌め之れを一考した時、或る者には通用するが或る者には役立つ結果を見る。即ち現代吾人一般の者の實踐的事實の前には、論註も役立つ御疏も間に合はなくなつて、本願念佛の普遍も必然の理は何處へか失はれ行くのである。

記主禪師は夢告の所謂「義をば極惡の罪人も往生する様に言べきなり」の訓を守り、之れを基本として、念佛實踐の道を、あらゆる人間（機）の實際的事實に當嵌め、最低限たる極重惡人頻死の場合（下中、下々の機）にも、心行具足し得らるる事を懇説し、如實行相の具體的の有様に就ても、實相爲物の二身を知るに云ふ事に就ても、其他念佛實踐の心行業の諸問題に就て、皆誰れしも事實に即して、實現し得らるゝ方途を開闡された。此の禪師の開導こそ、吾人に取りて救の道が障礙なく開かれたとも云ひ得られる。

五

此に於てか吾人愚惡の者の念佛實踐の前には、禪師の開導——五十餘帖——に依て鸞師の論註も生き、導師の觀經疏も生き、宗祖の選擇集も其他先哲の所述すべてが生かされて來た譯である。要するに禪師の教學——五十餘帖——は吾人に念佛往生義の普遍必然を事實の上に具現し、佛祖の眞意を傳へて、異義を是正し、吾人をして歪曲なく白道精進の方途を開導されたのである。本宗が古來、禪師の教學たる五十餘帖を、重書として秘藏尊重し、宗學の上に於ては所謂二祖三代の定判として、末代の龜鑑に仰ぐ所以、全く此等の點に存するのである。

禪師の教學に對し、或は其の繁鎖をかこち、或は宗祖及び鎮西との間に差別を見んごするが如きは、髓を逸して皮相を逐ふの類、吾人の與みせざる所、吾人をして云はしむれば、禪師の開導は、吾人の前には何等の惑ふ所なく寧ろ簡明

なるをよろこぶ、殊に又禪師は善導宗祖鎮西の眞意の尙幽微なりし所を、鮮明にされたるものなるべく、導空辨然の四師は、俱に諸佛の教意に契通して内鑑冷然、殊に二祖鎮西の「然阿是辨阿之成ニ盛年也」の語を省察する時、禪師の開導は鎮西上人開導の延長たるべし、されば強いて其の間の別を見立つる要なかるべし。唯だ仰で祖徳の廣大慈恩を謝せん。已耳

合掌